ー岩波文庫創刊９０年ー

三省堂書店
スタッフ厳選
永遠の定番
岩波文庫

フェア小冊子

2017.9

◆青一-一『風姿花伝(花伝書)』(世阿弥／野上豊一郎・西尾実校訂)
◆赤四三四-〇『トニオ・クレエゲル』(トオマス・マン／実吉捷郎訳)
どちらも実は他の文庫でも読めるが、これを読んだ頃、紙質・活字・文字の間隔、すべてが他の文庫よりも岩波文庫のものが好きでした。
どちらも、校訂の野上豊一郎や翻訳者・実吉捷郎の言葉の使い方も好きです。
(名古屋本店　福澤)

◆青一〇二-三『学問のすゝめ』(福沢諭吉)
・著名な冒頭の文だけで終わるのはもったいない。当時の本としては格別に読みやすい。若い方にもおすすめ。
(新横浜店　匿名)
・福沢諭吉の名作。天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず。
(有楽町店　石川)

◆青一一〇-一『中江兆民　三酔人経綸問答』(桑原武夫・島田虔次訳・校注)
明治の教養が、昭和の達意の訳注を介して平成に届けられている。これぞ岩波文庫からの恩恵。
(池袋本店　後藤)

◆青一一九-三『代表的日本人』(内村鑑三／鈴木範久訳)
日本人は素晴らしいと誇れる一冊。
(東京営業所　山田)

◆青一二四-一『善の研究』(西田幾多郎)
・日本人による、思惟の極限への道程の端緒。純粋経験から様々な語彙による議論を経て絶対矛盾自己同一の概念にたどり着くまでには根気が要るが、まずはここから。
(アトレ秋葉原店　太田)
・学生時代のテキストだった一冊。最初に読んだ時、日本語で書いてある文章なのに理解出来ず、幾度も読み返した。思考(思索)するとはどういうことかを、ガツンと突きつけられる。
(分類コード担当　三浦)

◆青一三八-七『蝸牛考』(柳田国男)
言葉の伝播を探りながら日本の周縁に光を当てるアカデミックな試みは今も新鮮。
(営業企画室　内田)

◆青一三八-一〇『婚姻の話』(柳田国男)
日本民俗学の創始者、柳田国男がどうやって結婚相手を見つけ、婚姻するのか、「聟入(むこいり)」、「婿入」、「お見合い」、「恋愛」それぞれを 学問として論じています。戦後直後の発売とは思えないほど現在の社会問題を予見しているのに驚きます。読物としても非常に楽しめるおすすめの一冊です。
(経堂店　小橋)

◆青一四四-一～五『特命全権大使　米欧回覧実記』全五冊(久米邦武編／田中彰校注)
条約改正を目的とした岩倉使節団の視察見聞記。原書は全一〇〇巻(五編五冊)という膨大なもの。その詳細な記述、精緻なイラストなど編者の博覧強記ぶりに感嘆せざるを得ない。明治維新一五〇周年を前にして是非、全五巻箱入りセットでこの機会に読んで頂きたい。
(神保町本店　平井)

◆青一四四-二『風土―人間学的考察―』(和辻哲郎)
日本人、欧米人気質をつくったもの、それが風土だったとは。
読んだ時目から鱗だった。
(神保町本店　母袋)

◆青一四四-一三『人間の学としての倫理学』(和辻哲郎)
日本語における人間という語は、個体としてのみではなく、その間柄、社会的つながりをも語義に含んでいる。それは単数形、複数形の区分が曖昧な日本語という言語の構造からも読み取ることが出来る。
(アトレ秋葉原店　太田)

◆青一四六-一『「いき」の構造　他二篇』(九鬼周造)
京都学派のスター的存在。ヨーロッパの哲学思想を学び洗練された論説がすこぶるクールで、九鬼その人の存在自体がとても「いき」であったのではないかと思う。
(営業企画室　雨宮)

◆青一五七-一『新版　きけ　わだつみのこえ―日本戦没学生の手記―』(日本戦没学生記念会編)
スタンダードな書籍ですが、おすすめ致します。（外商推進部　今井）

◆青一五八-一『君たちはどう生きるか』(吉野源三郎)
出会えてよかったと思えた一冊です。
生きていくうえで大切なこと、この本を読んで自分はこれからどう生きていくか、いろいろ考えさせられました。（池袋本店　金澤）

◆青一六四-一『忘れられた日本人』(宮本常一)
辺境の地に住まう「声なき文化」の日本人を克明に記録した、民俗学の巨人・宮本常一の代表的名著。（神保町本店　上條）

◆青一六九-二『手仕事の日本』(柳宗悦)
日本各地の特産品が小間絵と共に紹介されていて楽しい。土地土地の歴史や伝統を知ることができます。柳さんの文章を読んでいると自然と心が整う感じがするから不思議です。（外商推進部　下田）

◆青一七五-一『日本の民家』(今和次郎)
赤瀬川原平、藤森照信らの「路上観察学会」に連なる考現学に至る前の、まだ柳田国男の下にいた頃の民俗学的手法による記録。この頃から学問としてはアウトサイダーすれすれ。（アトレ秋葉原店　太田）

◆青一八五-一『イスラーム文化―その根柢にあるもの―』(井筒俊彦)
イスラーム文化を知らずに現代社会は語れない。講演会を改めて活字にした本書は、そのせいかとても読みやすい。入門書としておすすめです。（新横浜店　匿名）

◆青一八五-二『意識と本質―精神的東洋を索めて―』(井筒俊彦)
東洋的思想とは何か、という問いを外からの視座で、淀みない日本語で示される。通読も容易。（アトレ秋葉原店　太田）

◆青一九九-一『山びこ学校』(無着成恭編)
生徒たちの文集や作文から教育課題をみつけようという試みの記録。市井の人たちの声に耳を傾けるという姿勢は戦後民主主義の大きな柱にもなったのではないか。（営業企画室　雨宮）

◆青二〇二-一『論語』(金谷治訳注)
今でも色褪せない論語の教えはまさに人類の名著です。（東京駅一番街店　後藤）

◆青三一九-〇～三『正法眼蔵』全四冊(道元／水野弥穂子校注)
禅宗である曹洞宗における日本の開祖、道元。思想的側面のみならず、その文章の美しさも読んで頂きたい。（アトレ秋葉原店　太田）

◆青三二三-一『日本的霊性』(鈴木大拙／篠田英雄校訂)
日本人の宗教意識はいつごろ目覚め、どのような文化段階を経て内面化されたのか。（名古屋本店　畑中）

◆青三二三-二『新編　東洋的な見方』(鈴木大拙／上田閑照編)
晩年の著作。明朗闊達な文章は、それまでに成した大きな仕事に裏打ちされてはいるが、そこから離れてこの本から入るのも分かりやすいと思います。（アトレ秋葉原店　太田）

◆青四二五-一～二『一外交官の見た明治維新』全二冊(アーネスト・サトウ／坂田精一訳)
幕末維新の真っ只中。当事者にしか描けない臨場感が味わえる第一級史料。（営業企画室　内田）

◆青四六六-一『東京に暮す―一九二八～一九三六―』(キャサリン・サンソム／大

久保美春訳）

昭和初期の東京に暮した、イギリス人外交官夫人の日本滞在記。明治初期にイザベラ・バードが日本奥地を旅した当時よりも、昭和三年～十一年までの滞在記なので、より現代に近い感覚で読み進めることができます。

著者が指摘する問題点は、今でも改善されていなかったり…と相変わらずなんだなぁ、と感心できちゃったりも。金融恐慌から二・二六事件を経て暗い時代への過渡期に描かれていますが、極々身近な「世間」だけが対象となっているのも興味深いところです。

（神保町本店　白井）

◆青五五〇-一～二『レオナルド・ダ・ヴィンチの手記』全二冊（杉浦明平訳）

あまりにも膨大な偉業の数々と逸話によって、まるで遠い星の住人であったかのように感じられさえするダヴィンチ。製作への姿勢を論ずる文の圧倒的な正論さに、天才の中にある作家としての確かな一面を見る。

（神保町本店　小菅）

◆青六〇四-一～二『アリストテレス　ニコマコス倫理学』全二冊（高田三郎訳）

「いかなる技術、いかなる研究も、同じくまた、いかなる実践や選択も、ことごとく何らかの善を希求していると考えられる」。

（そごう千葉店　竹中）

◆青六一〇-一『マルクス・アウレーリウス　自省録』（神谷美恵子訳）

「政治は哲学者に任せるべき」とはプラトンの言ですが、人類史上たった一度だけ、それが実現した時代があります。ローマ皇帝マルクス・アウレリウス・アントニヌスが、まさに自省の為に、公務の合間や戦場で記し続けた手記。時折パラリとめくってみるだけでも、何か助言が得られるかも知れません。

日々、“三省の心”を胸に仕事に励んでいる我々ですが、他にもまだまだ自省せねばならない事ばかりです。

（神保町本店　竹村）

◆青六一五-四～五『スピノザ　エチカ（倫理学）』全二冊（畠中尚志訳）

冒頭からでなくとも、下巻の第四部 から読めばいいそうです。

（名古屋本店　畑中）

◆青六二五-三～五『純粋理性批判』全三冊（カント／篠田英雄訳）

たくさんの訳があるが、もちろん岩波文庫にも収められている。世界と私たちが「知る」という仕方で関れるとはどういうことなのか。単に刺激が生体に加えられるというだけでは、何かを知るという現象は尽くされない。

（そごう千葉店　竹中）

◆青六二五-九『永遠平和のために』（カント／宇都宮芳明訳）

近年の政治にまつわる議論においてもなお頻繁に参照される古典。カントからロールズに至る流れはどの時代においても踏まえられるべき議論である。

（アトレ秋葉原店　太田）

◆青六三二-二『読書について』（ショウペンハウエル／斎藤忍随訳）

このまま本を読み続けていてもよいのか。

すべての本読みに。

（新横浜店　匿名）

◆青六三九-二～三『ツァラトゥストラはこう言った』全二冊（ニーチェ／氷上英廣訳）

巷のニーチェ名言集みたいな本では得られない、まさに魂の叫びのような迫力と勢い、ユーモア、ライブ感を感じられる原文訳にぜひ触れてみて下さい。「おしまいの人間」たちに捧げる熱いメッセージ。

（そごう千葉店　神原）

◆青六八九-一『論理哲学論考』（ウィトゲンシュタイン／野矢茂樹訳）

・師ラッセルに「哲学上の一大事件」と言わしめた論理哲学の基本テキスト。厳密なナンバリングに裏打ちされた一部の隙も容赦もない論理体系構築の中に、何故か溢れる詩情に心打たれるべし。

最後の一文は似非哲学者を気取るのにも使えそう。

野矢茂樹の訳と解説が、この岩波版を抜きん出た存在にしている。

（店舗開発室　奥出）

・（後に自身で撤回するものの）ウィトゲンシュタインが一度は「この本をもって

哲学の諸問題をすべて解決した」と考えた本。訳者の解説もよい。
（そごう千葉店　竹中）

◆青六九〇-四『重力と恩寵』（シモーヌ・ヴェイユ／冨原眞弓訳）
読むそのときどきの自分がヴェイユの言葉に映るので、一行でうちのめされることもあれば、力をもらうこともある。ヴェイユの思想の硬質な純潔に憧れがある。
（神保町本店　大塚）

◆青八〇一-四『旧約聖書　ヨブ記』（関根正雄訳）
・英会話の勉強をするよりもヨブ記が大事。ヨブ記の読み方を二、三知っていると　よく考えよく生きることができる気がします。（そごう千葉店　川島）
・この苦しみの意味は何なのか？　ヨブの問いに対する神の不可解な答えは何を意味しているのか。
（そごう千葉店　竹中）

◆青八〇三-三『文語訳　新約聖書　詩篇付』
文語体だからこそ伝わる日本語の美しさと文学としての聖書の価値。ぜひ、声に出して読んで欲しいです。
（東京駅一番街店　後藤）

◆青九〇二-一『科学と仮説』（ポアンカレ／河野伊三郎訳）
ポアンカレによる科学読物の古典。なぜ私たちは世界について知ろうとするときに科学にこれほどまで信頼をよせるのか。
（そごう千葉店　竹中）

◆青九〇九-一『ロウソクの科学』（ファラデー／竹内敬人訳）
科学の深遠に触れる古典的名著。
（新横浜店　匿名）

◆青九一九-一～九、九二〇-〇『完訳　ファーブル昆虫記』全十冊（山田吉彦・林達夫訳）
山田吉彦（きだ　みのる）の訳で読めるのは岩波文庫だけ。
全巻揃えて好きな頁を開いてみてはいかが。
（神保町本店　関根）

◆青九四三-一『生物から見た世界』（ユクスキュル、クリサート／日高敏隆・羽田節子訳）
生きている世界が違う、は文字通り違う。
（名古屋本店　畑中）

◆青九四六-一『生命とは何か―物理的にみた生細胞―』（シュレーディンガー／岡小天・鎮目恭夫訳）
一九四四年の本である。生命現象を物理学と化学の言葉で解き明かそうとした試み。当時の若い研究者たちを熱狂させ、その後の分子生物学の興隆を引き起こした古典。
（そごう千葉店　竹中）

◆黄一九-一～四『今昔物語集』全四冊（池上洵一編）
仏教説話を中心に編集。あの芥川、室生、福永に創作刺激を与えた珠玉の四分冊です。
（東京駅一番街店　後藤）

◆黄二三-二『西行全歌集』（久保田淳・吉野朋美校注）
宇宙的なものを感じながら、海・山で読みたい一冊。
（創英社　塚本）

◆黄一一六-一『神皇正統記』（北畠親房／岩佐正校注）
学生時代もっとも苦労して入手した一冊。これが棚に並んでいるだけで嬉しい…
（営業企画室　内田）

◆黄二二六-一『北越雪譜』（鈴木牧之編撰／京山人百樹刪定／岡田武松校訂）
江戸時代の雪国の暮らしをありのままに描き、そこに住まう人々の息遣いを感じます。
自然の恵みや厳しさ、人々の知恵。
さまざまなエピソードが収められ、当時の風土を知ることができる後世に遺すべき名著。
（池袋本店　早野）

◆緑一一-一『こころ』（夏目漱石）
高校の時授業で使いました。
（神保町本店　吉田）

◆緑一二-一『五重塔』(幸田露伴)
文語体で読みにくいけれど、ぜひ紙で、岩波文庫で、読んで欲しい一冊。この薄さも込みで傑作です。
(神保町本店文具　及川)

◆緑一三-二『病牀六尺』(正岡子規)
・子規最期の日常と魂が伝わる随筆集。極小の空間から無限の宇宙が見えてくる。
(営業企画室　内田)
・最期まで生き生き「ノボさん」。
(有楽町店　岡崎)

◆緑二三-二『破戒』(島崎藤村)
時代は違えど、青年が自分のアイデンティティーと世間との軋轢に葛藤する気持ちは不変であると感じられる一冊。大学生時代に読んで、その苦悩の鮮やかさが心を突いた。
(神保町本店　小菅)

◆緑二五-二『大つごもり・十三夜　他五篇』(樋口一葉)
声に出して読むと「逝きし世の面影」がしのばれます。
(創英社　塚本)

◆緑二七-二『歌行燈』(泉鏡花)
日本人に生まれ日本語を解しながら、鏡花の作品を読まないのは、折角の日本人たる特権を抛棄しているようなものだと中島敦に言わしめた、鏡花文学の精髄。
(神保町本店　上條)

◆緑二七-三『夜叉ケ池・天守物語』(泉鏡花)
鏡花の文体が苦手なひとはこれから始めるとよいと思います。
(そごう千葉店　川島)

◆緑三七-七『柿の種』(寺田寅彦)
我が三省堂書店の風景が記録されています。
(売店管理課　矢沢)

◆緑四一-四『つゆのあとさき』(永井荷風)
高校時代の国語教師が荷風マニアで影響を受けた。『断腸亭日乗』も素晴らしい。
(営業企画室　内田)

◆緑四六-六『志賀直哉随筆集』(高橋英夫編)
小説の神様による随筆。なめらかな描写故に、話がさらりと入ってくる。まさに美文。同時代の作家論も興味深い。
(分類コード担当　三浦)

◆緑五四-四『ISIKAWA TAKUBOKU　ROMAZI NIKKI―(啄木・ローマ字日記)』(桑原武夫編訳)
作家の内面を抉り出す。赤裸々という言葉がこれほど相応しい作品はない。
(営業企画室　内田)

◆緑五五-一『蓼喰う虫』(谷崎潤一郎／小出楢重画)
一〇代で途中で放り出したのを三〇代で読み直したらまあ面白いこと！ 小出楢重の挿絵も独特。
(池袋本店　海老原)

◆緑六六-二『室生犀星詩集』(室生犀星自選)
犀星本人による自選詩集。甘く切ない、そしてどこか懐かしい詩がじわりと染みます。
(分類コード担当　三浦)

◆緑七〇-一一『侏儒の言葉・文芸的な、余りに文芸的な』(芥川竜之介)
芥川らしい鋭い洞察力と皮肉のこもった短い文章が、人生に迷った時の心にぐさっと刺さります。
(新横浜店　匿名)

◆緑九〇-四『人間失格　グッド・バイ　他一篇』(太宰治)
・「人間失格」の直後に連載がはじまった未完の絶筆「グッド・バイ」であるが、作者らしい軽妙さがおかしみを誘う。
解説にある作者の考えていた結末を読むことができないのが残念でならない。
(アトレ秋葉原店　太田)

・この一冊をポケットに忍ばせて世を眇める年頃があってもいいはずです。
（創英社　塚本）

◆緑一一〇-三『銀座復興　他三篇』（水上滝太郎）
焼け野原の銀座にたったひとつ灯った飲み屋のランプが感動的です。
（売店管理課　矢沢）

◆緑一四五-一『山月記・李陵　他九篇』（中島敦）
声をきいてそれが親友のものと気づくあたりがほんとうにくすぐったい。
（神保町本店　匿名）

◆緑一四八-一『新選　山のパンセ』（串田孫一自選）
串田孫一が自選した山の随想集。北アルプス、松本から上高地へ至る山行「島々谷の夜」だけでも読む価値ありです。
（神保町本店　関根）

◆緑一六九-三『放浪記』（林芙美子）
貧乏でも不幸でも、それでも人は前向きに生きていける。
辛い日常を綴った文章から得られる爽快な読後感がいつまでも心に残り続ける。
（アトレ秋葉原店　太田）

◆緑一七五-一～二『食道楽』全二冊（村井玄斎）
明治時代の方が今より遥かに食が豊かだったように思います。
（南東京営業所　菅原）

◆緑一八二-一『堕落論・日本文化私観　他二十二篇』（坂口安吾）
年を取るたびに、受け取り方が違います。
（神保町本店　匿名）

◆緑一八二-三『風と光と二十の私と・いずこへ　他十六篇』（坂口安吾）
いつ読んでも、何度読んでも安吾は新しい。『いずこへ』の書き出しの素晴らしさについてなら、一晩でも二晩でも語り明かせる。
（神保町本店　大塚）

◆緑一八四-一『久生十蘭短篇選』（川崎賢子編）
岩波書店の英断か、久生十蘭が文庫入り。戦争物・ミステリー・歴史小説・幻想文学・怪奇小説と変幻自在の様相を見せる十蘭珠玉の一冊。
（神保町本店　上條）

◆緑一九五-一『茨木のり子詩集』（谷川俊太郎選）
けっして色褪せないしなやかな逞しさを感じられる詩集。
その研ぎ澄まされた感性に何度もはっとさせられる。
（アトレ秋葉原店　太田）

◆緑一九八-一『辻征夫詩集』（谷川俊太郎編）
ライト・ヴァースと辻征夫を知ったのは同時だった。言葉からこぼれおちるものを言葉で綴ろうとしている。その矛盾の崇高さが、やわらかい言葉にあふれている。
（神保町本店　大塚）

◆緑二〇〇-一『石垣りん詩集』（伊藤比呂美編）
食べること、働くこと、生きること。
「日常」と向き合い、静かだが力強い言葉で紡がれた詩は、どんな一日にも価値があると思わせてくれる。
（アトレ秋葉原店　太田）

◆白一二四-五『共産党宣言』（マルクス、エンゲルス／大内兵衛・向坂逸郎訳）
学生時代、友人にすすめられましたが、「共産主義者ではないから」と敬遠しました。
大人になって読んでみると、労働者階級が多く占める社会で階級闘争問題の解決を考察するのに参考になる資料だと思います。
（東京駅一番街店　後藤）

◆白一四五-一～二『雇用・利子および貨幣の一般理論』全二冊（ケインズ／間宮陽介訳）
読み解くのに非常に苦労する書籍。けれども難解だからこそ、読むだけの価

値がある。

（神保町本店　中村）

◆白二〇九-三『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（マックス・ヴェーバー／大塚久雄訳）

何か一冊完璧に理解できる、という願いがかなうなら、この本を選びます。

（営業企画室　鈴木）

◆赤二〇-一～一〇『西遊記』全十冊（中野美代子訳）

現在刊行されている中で完訳が読めるのは岩波文庫だけ。仏教・道教の入り混じる不可思議な世界が横溢する中国伝奇ロマン。

（神保町本店　上條）

◆赤二五-二『阿Q正伝・狂人日記　他十二篇』（魯迅／竹内好訳）

・初めて買った岩波文庫。当時は読み終えた！それだけで満足だったが大人になって「読んだ」ことが大きな糧になっていることに気づいた本。

（新横浜店　匿名）

・ちょうど一〇〇年くらい前に書かれた作品集です。一〇代の頃も「イカレてる」と思いましたが、大人になっても「…！」と思いました。

（有楽町店　岡崎）

◆赤四〇-一～二『聊斎志異』全二冊（蒲松齢／立間祥介編訳）

・中国清代に書かれた怪異短編集。

こわい話、不思議な話が好きな私にとって、何度も読み返すほどのバイブルです。

（東京駅一番街店　後藤）

・異類婚姻譚好きの方にオススメです。九二篇の大ボリューム！！

（そごう千葉店　匿名）

◆赤一〇二-一～二『ホメロス　イリアス』全二冊（松平千秋訳）

◆赤一〇二-四～五『ホメロス　オデュッセイア』全二冊（松平千秋訳）

怒りを歌え、女神よ。ペレウスの子アキレウスの忌わしい怒りを！

阿刀田　高の「ホメロスを楽しむために」を頼りに読みました。

（名古屋本店　畑中）

◆赤二〇三-一～三『完訳　カンタベリー物語』全三冊（チョーサー／桝井迪夫訳）

イギリス文学、というか世界中の物語の中でも私の大好きな作品の一つで、読んだことが無いイギリス人の友人に逆に勧めたぐらいです。いつかこの本を持って、カンタベリー大聖堂に行って、この物語がいかに素晴らしいかをみんなに伝えるのが夢です。

（東京駅一番街店　後藤）

◆赤二〇六-二～三『失楽園』全二冊（ミルトン／平井正穂訳）

格調高い名訳と共に、アンチヒーロー的に描かれるサタンの生き様が強烈に魅力的な一冊。

（池袋本店　堀尾）

◆赤二三五-一『ギリシア・ローマ神話　付　インド・北欧神話』（ブルフィンチ／野上弥生子訳）

聖書と並んで、西洋文化の基礎となっているギリシア神話。

どこかで目にしたエピソード、はたまた神話の原型の共通点など、色々な角度からも楽しめます。

（海老名店　大谷）

◆赤二三八-七『ディケンズ短篇集』（小池滋・石塚裕子訳）

長編だけじゃない、ディケンズの送る傑作集。

（東京駅一番街店　水谷）

◆赤二四二-一『宝島』（スティーヴンスン／阿部知二訳）

何かにトライする気持ちと高揚感は、どのタイミングであっても忘れたくないなと思う一冊。

普通と思われがちな、このタイトルが本当に好きです。

（名古屋本店　本間）

◆赤二四五-二『サロメ』（ワイルド／福田恆存訳）

・ビアズレーの挿絵も秀逸。

・ビアズリーの挿絵と相まってワインで悪酔いしたときのような、ぐわんぐわん響く余韻が残ります。

（そごう千葉店　川島）

（海老名店　大谷）

◆赤二四八-一　『闇の奥』（コンラッド／中野好夫訳）
コッポラ『地獄の黙示録』の原案。切り込むことに対する恐怖と、引き込まれることへの怯えが引き起こす悲劇を、ドミノ的に連鎖させていく。
（アトレ秋葉原店　太田）

◆赤二五四-一一～一二　『モーム短編選』全二冊（行方昭夫編訳）
娯楽的な読み物ながら、人間の多面性、矛盾した心理をたくみに描いたモームの名作短編集。行方昭夫による新訳・名訳も美しい。
（神保町本店　上條）

◆赤二六二-四　『動物農場―おとぎばなし―』（ジョージ・オーウェル／川端康雄訳）
言わずと知れた『一九八四年』と並ぶオーウェルの傑作寓話。
色々な訳版が出ているので、読み比べるのも楽しい。
いつの時代、どこの国でも、登場する「動物」たちが誰かの姿に重なる。
永遠に色あせない傑作。
（営業企画室　内野）

◆赤二七六-一　『タイム・マシン　他九篇』（H・G・ウエルズ／橋本槇矩訳）
標題をはじめとしていくつかの長編が有名なウエルズですが、短篇も面白いです。
SFもあればホラーもあり、ナンセンスもあり。
おすすめはこの文庫に収録されている「盲人国」。
自分の価値観や立ち位置を揺さぶられる一作です。
今、ウエルズの短篇がまとめて読めるのは多分岩波文庫だけだと思います。
（池袋本店　津久井）

◆赤二七六-三　『モロー博士の島　他九篇』（H・G・ウエルズ／橋本槇矩・鈴木万里訳）
『タイム・マシン』『透明人間』のH．G．ウエルズによる怪奇SF小説集。
古典SFでありながら少しも古びない面白さを味わえる一冊。
（神保町本店　関根）

◆赤二八九-一　『完訳　ナンセンスの絵本』（エドワード・リア／柳瀬尚紀訳）
こちらも対訳で、しかも、挿絵が可愛い！
英語の言い回しの勉強にも。
（神保町本店　白井）

◆赤三〇六-二　『対訳　ポー詩集―アメリカ詩人選（1）―』（加島祥造編）
・愛した美しい女の死。
多数の小説、映画、漫画、にも影響を与えた、退廃的で美しい詩集です。
音楽を意識したという詩の数々です。
英語が苦手でも、一度ゆっくり声に出して欲しいです。
（神保町本店　大和）
・他の詩集も対訳で載っているので、他の文庫の訳と比べてみるのも楽しみのひとつでは。
（神保町本店　白井）

◆赤三一〇-一　『対訳　ディキンソン詩集―アメリカ詩人選（3）―』（亀井俊介編）
・一人の女性の中にある溢れんばかりの情熱に触れる一冊。
自分の人生を思うとき、全てに拒絶されたと感じるか、それとも希望は常にあると考えるか？　常に光を見る作者の想像力は現実をはるかに超えていく。
（神保町本店　小菅）
・他の詩集も対訳で載っているので、他の文庫の訳と比べてみるのも楽しみのひとつでは。
（神保町本店　白井）
・個人的でいて、力強く、やわらかい天才詩人ディキンスンの詩集。
難しい言葉ではなく、それでいて深い情念が伝わる一冊です。
（神保町本店　大和）
・黒柳徹子さんが敬愛する詩人として知られるエミリ・ディキンソン。
生涯の大部分を自宅で過ごしていたという彼女の、詩作への内なる情熱が伝わる作品。
（成城店　石田）

◆赤三一二-二　『新編　悪魔の辞典』（ビアス／西川正身編訳）
ピリ辛でブラック、深くてユーモアたっぷりの大人のための格言集。
（名古屋本店　津久井）

◆赤三一八-一『シカゴ詩集』(サンドバーグ／安藤一郎訳)
一九一〇年代アメリカ中西部の都会シカゴの雰囲気を味わえる一冊。キング牧師よりずっと前、アル・カポネよりちょっと前のシカゴです。
(外商推進部　下田)

◆赤三二三-三『熊　他三篇』(フォークナー／加島祥造訳)
難解な作家と言われるフォークナーですがこの短編集は読みやすい。少年の目を通して多様な人間が描かれ実に面白い。
(外商推進部　下田)

◆赤三二三-八～九『八月の光』全二冊(フォークナー／諏訪部浩一訳)
内容以前に、毎年八月になるとこのタイトルを思い出します。
(名古屋本店　畑中)

◆赤三二七-一～三『怒りのぶどう』全三冊(スタインベック／大橋健三郎訳)
※上巻=品切・重版未定
住み慣れた土地を追われて、国道六六号をおんぼろトラックで新天地「カリフォルニア」を目指す一家。果たして「カリフォルニア」は約束の土地だったのか。あとどうして「ぶどう」なのか。
(名古屋本店　畑中)

◆赤三四二-一～六『風と共に去りぬ』全六冊(マーガレット・ミッチェル／荒このみ訳)
強烈な個性を持つ女性が、激動の時代を生き抜く物語。
主人公のスカーレット・オハラに、安室奈美恵さんを思い浮かべながら、全六冊一気に読了。
(営業企画室　鈴木)

◆赤四〇九-一～三『ゲーテとの対話』全三冊(エッカーマン／山下肇訳)
・スタンダードな書籍ですが、おすすめ致します。
(外商推進部　今井)
・いろいろな本で激賞されているのでいつか読破したいです。
(創英社　塚本)

◆赤四一七-一『影をなくした男』(シャミッソー／池内紀訳)
大金持ちになることと引き替えに影を失った男は、影がないために人々から冷たい仕打ちを受けるようになる。
(SS天王寺　水谷)

◆赤四三三-六～七『魔の山』全二冊(トーマス・マン／関泰祐・望月市恵訳)
はじめて読んだ時は、逃げ出した小説。
ストーリーの重さはもちろん、思想教養の情報量が恐ろしいほど。
でも、その分読破後の充実感はすごく、すごく覚えている。
(名古屋本店　本間)

◆赤四三七-一～二『マリー・アントワネット』全二冊(シュテファン・ツワイク／高橋禎二・秋山英夫訳)※下巻=品切・重版未定
私の初の岩波文庫は確かこれです。中学生くらいの時にアニメのベルばらを見て、とかで読んだと思います。
(本社スタッフ　匿名)

◆赤四三八-三『カフカ短篇集』(池内紀編訳)
カフカといえば分厚いレンガのような文庫のイメージをもたれるが、カフカの短編にこそ彼のエッセンスが詰まっています。
(神保町本店　加藤)

◆赤四五四-一『ウィーン世紀末文学選』(池内紀編訳)※品切・重版未定
シニッツラーやムージルなどの中篇が手軽(?)に読めます。
(神保町本店　白井)

◆赤四六〇-一『ドイツ名詩選』(生野幸吉・檜山哲彦編)
旅行へ行く前には、その国の本を読みます。ライン川が、ハルツ山地が懐かしい！ゲーテもリルケもケストナーもいます。いろんな意味でおすすめです。
(有楽町店　岡崎)

◆赤五二三-一～二『危険な関係』全二冊(ラクロ／伊吹武彦訳)
一八世紀後半の貴族社会を、ある男女の手紙形式で描く。
過去に何度も映画化・舞台化され、時代が変わっても人間の本質は変わらないことを教えてくれる。

著者が軍人であったことから、恋愛ゲームの駆け引きを、戦争における心理戦に例えて読むことも。
綺麗に飾られた言葉の裏の裏を探るのもまた楽しい。（営業企画室　内野）

◆赤五三二-三～四『ノートル＝ダム・ド・パリ』全二冊（ユゴー／辻昶・松下和則訳）
ラストシーンが美しい！ロマンチック！！
ディズニーや、ミュージカルなどではカジモドが主役になって、ハッピーエンドになってしまっているが、原作は、教会が大きな権力を持ち、荒廃した時代の、神に仕える身であるにもかかわらず、恋に落ちてしまった聖職者の苦しみが伝わって来る人間ドラマとなっている。（神保町本店　三間）

◆赤五三三-一～七『モンテ・クリスト伯』全七冊（アレクサンドル・デュマ／山内義雄訳）
・岩波文庫とあなどることなかれ。
血わき肉踊るエンターテイメントに読み出したらとまらない。（神保町本店　母袋）
・とある春休みに一気読みした学生時代の思い出のシリーズ。（海老名店　根岸）
・どうせ買い足しにいくから最初から全巻買い揃えておいたほうがいいです。（名古屋本店　畑中）

◆赤五五二-一『地獄の季節』（ランボオ／小林秀雄訳）
三島由紀夫に「早熟な天才以上のもの」とまで言われた、ランボオの詩集。
「永遠」を最初に読んだ時の衝撃は忘れられません。（神保町本店　大和）

◆赤五六九-二『地底旅行』（ジュール・ヴェルヌ／朝比奈弘治訳）
童心に帰って冒険ができる！（神保町本店　匿名）

◆赤五九〇-一『シュルレアリスム宣言・溶ける魚』（アンドレ・ブルトン／巖谷國士訳）
シュルレアリスムが何かを知った後にその作品が読めてしまう一冊。（そごう千葉店　千坂）

◆赤N五〇九-一『物質的恍惚』（ル・クレジオ／豊崎光一訳）
ノーベル賞作家クレジオの著。ジャケ買いならぬタイトル買い。タイトルがカッコイイから買った。（そごう千葉店　川島）

◆赤六〇八-四『初恋』（ツルゲーネフ／米川正夫訳）
高校生の頃。記憶にある限り初めて手にした岩波文庫。
ざっくりとしたあらすじは知っていて、何か岩波文庫を読んでみようかな、ぐらいの気持ちで手にした作品。今でも本棚に収まっている。
短い夏と短い青春のひとときが印象的。（営業企画室　内野）

◆赤六一三-五～七『罪と罰』全三冊（ドストエフスキー／江川卓訳）
「ひとつの罪は百の善行で償える」「非凡人は、凡人社会の道徳や法律を超越して構わない」独自の理論を盾に、強欲な老婆を殺害した青年ラスコーリニコフだったが、犯行現場を目撃した罪無き女性をも殺めてしまった事から、罪の意識にどんどん苛まれていく…
一五〇年も昔に書かれたこの小説は、文学、ミステリ、恋愛、哲学、宗教、などなどおよそ物語の持つあらゆる要素を詰め込んだ壮大なスケールを誇る大作。予審判事ポルフィーリィとの丁々発止の遣り取りは、さながら、『DEATH NOTE』のキラとLのよう。
ポピュラーな新潮・工藤訳や、露文翻訳の大家である角川の米川訳、リーダビリティ溢れる新しさが売りの光文社・亀山訳もある中で、名訳と名高い岩波・江川訳はいかが？（神保町本店　竹村）

◆赤六一九-一『トルストイ民話集　人はなんで生きるか　他四篇』（中村白葉訳）
“人はなんで生きるのか”その答えが書いてあります。
迷っているときに読むとスッキリします。（神保町本店　匿名）

◆赤六四八-二～三『巨匠とマルガリータ』全二冊（ブルガーコフ／水野忠夫訳）
二〇世紀ロシア最大の奇想小説を岩波文庫で。（東京駅一番街店　水谷）

◆赤七〇九-三『むずかしい愛』(カルヴィーノ／和田忠彦訳)

以前、とある小説を読んでいて、「海水浴に来た主婦が、海で水着(しかも下！)を流されてしまって困る話」というのが出てきたので、気になって調べてみた所、この本に辿り着きました(『ある海水浴客の冒険』)。「よくもまぁ、こんなテーマで書こうと思ったものだ」という主人公の独白に大いに頷いたものです。そして、そんな痒い所に手が届く岩波文庫って、本当にスゴい。(神保町本店　竹村)

◆赤七一四-五『月と篝火』(パヴェーゼ／河島英昭訳)

イタリアの作家パヴェーゼの遺作。

イタリアのとある寒村に暮らす人々を巡る過去と現在の出来事をつづる。

月とは何を、篝火とは何をあらわしているのかについて、わずかでも直観しえたその時、この作品の相貌は一変する。

読む者はそのとき、たしかな戦慄をおぼえる。　(新横浜店　山田)

◆赤七一九-一『タタール人の砂漠』(ブッツァーティ／脇功訳)

・幻想的で神秘的な不条理小説。　(東京駅一番街店　水谷)

・焦らされるのに面白い！　(神保町本店　匿名)

◆赤七七〇-一～三『クオ・ワディス』全三冊(シェンキェーヴィチ／木村彰一訳)

美しい生き方、醜い生き方、それを分けるのは、どのような価値にコミットするかではなく、ある価値にどのようにコミットするか、なのかもしれない。

(そごう千葉店　竹中)

◆赤七七四-一『山椒魚戦争』(カレル・チャペック／栗栖継訳)

◆赤七七四-二『ロボット(R・U・R)』(チャペック／千野栄一訳)

どちらもチャペックの古典的なSFです。

意外にも、岩波文庫から出ているのが不思議。　(神保町本店　白井)

◆赤七九〇-一『ゴルタサル短篇集　悪魔の涎・追い求める男　他八篇』(木村榮一訳)

・サクッと読める短編集だが、ずしりと重い価値ある一冊。

現実から徐々に非現実的な世界へと旅をする。

だがその境は本当に曖昧で行ったり来たり。

故に幻想の中にも現実以上の生々しさを感じてしまう。

加えて、どの話も余韻を残し、そこで終わらないのもじわじわとくる怖さがあって面白い。　(明治大学和泉売店　水嶋)

・アルゼンチンの作家ゴルタサルの代表作一〇篇をおさめる。現実と非現実とが継ぎ目無く入れ替わる、独特の作風によって読者はいつしか、読む前には思ってもみなかったようなところへたどりついている。　(新横浜店　匿名)

◆赤七九二-一『伝奇集』(J. L. ボルヘス／鼓直訳)

幻想短篇作家のボルヘスの非凡な迷宮的想像世界を知りたいなら、まずはこの本です。　(東京駅一番街店　後藤)

◆赤七九二-五『詩という仕事について』(J. L. ボルヘス／鼓直訳)

ボルヘスの講義録。なめらかな語りからボルヘスの世界も見えるし、ボルヘスの言葉から世界を眺めることもできる。　(神保町本店　大塚)

◆赤八〇一-一『やし酒飲み』(エイモス・チュツオーラ／土屋哲訳)

初めて読んだアフリカ文学だったと思う。

神秘的でユーモアがあって、荒唐無稽な冒険をして、ストーリーめちゃくちゃ。

日本の神話と通じるところがある(死者の国にやし酒つくりを捜しに行くところとか)。　(神保町本店　三間)